

1983.11

愛鳥教育

NO.11

愛鳥教育研究会

教育と自然保護の間で

(財)日本鳥類保護連盟

松田 道生

この間、古い新聞の切りぬきを整理していたら、世田谷区が巣箱架けを奨励したところ、地元の保護団体がかみついたという話が載っていた。

新聞は読売で、昭和50年5月28日、8年前になる。都内版ではあるが8段のあつかいで結構大きな記事だ。きっかけは、環境週間のイベントに、世田谷区健康都市推進課が、学校改築で出た廃材で巣箱を作らせようとしたら、「世田谷区民の森運動」を進めている自然保護団体からクレームがついたというもの。

保護側の意見は「巣箱架けは時代遅れだ。自然に繁殖できる自然環境作りが先決」。区は「巣箱作りで自然観察などの教育効果も上がっている」と述べ、最後に私のコメントで「巣箱作りは第一歩。今後の計画に注目したい」とむすばれている。

8年前のことなので、どういういきさつで私がコメントを述べたか記憶はさだかでないが、ここ8年で世田谷区の愛鳥活動が飛躍的にのびたことは事実である。

さて、この論争の主旨は、教育効果を目的とし、自然保護を手段としている区と、自然保護を目的としている保護団体との意見の相違にあるといえるだろう。当会でも、巣箱架けは是か非かという議論が時々されるが、最近では教育効果、特に情操教育に有効であるという一言であまり問題にならなくなった。世田谷区にしても上のコメントにあるように教育にポイントを置いている限り、有効な手段であると思っていた。その結果、二子玉川小学校や船橋小学校などの愛鳥モデル校が誕生したと言えるだろう。

しかし、教育か自然保護か、の問題は今後も出てくるだろう。たとえば、巣箱コンクールなどで鳥が入るか入らないかのみで評価し、子供の努力を見ないことに対しての先生方の不満を聞いたことがある。愛鳥週間ポスターコンクールでも、鳥の絵が間違っていないかという論議はされるが、子供が子供なりにとらえた鳥のイメージはあまり議論されないのは残念である。

ここで、教育か自然保護か、の結論は言えないし、言うべきではない。教育が充実してこそ自然保護がなりたつし自然の無い中での教育はありえない。ただ、今やっている活動が、どこに重さを置いているか、指導者には自覚が必要であることだけは確かだ。

目 次

巻頭言	松田道生	2
御岳山研修会		4
愛鳥教育をどのようにすすめてきたか	渥美守久	5
講演・鳥との接し方	中坪礼治	10
意見交換会から	梅本 登	13
愛鳥活動のヒント 3	柴田敏隆	15
愛鳥講座Ⅵ・愛鳥教育の計画 2	下田澄子	16
愛鳥講座・探鳥会の準備と実施	松田道生	23
静岡県・愛鳥校のつどい		29
国会周辺に巣箱架け・その後		30
編集後記		30

愛鳥教育 No. 11

昭和58年11月1日

編集人 松田道生
発行人 田村活三

発行所 愛鳥教育研究会
住 所 〒150東京都渋谷区宇田川町37-10
渋谷レジデンシャルオフィス405
(財)日本鳥類保護連盟内

電 話 東京03(465)8601
郵便振替 東京2-92041
制 作 かなえ書房

御岳山研修会

愛鳥教育研究会も発足して4年目、なんとかやらなくてはならないことがわかり、やるべきこともわかってきたようです。さて、今年も東京の御岳山で第11回目の夏季研修会が8月11・12日の2日間開かれました。

御岳山での研修会は今年で3回目。会場の御岳山ビジターセンターも、宿のうつば屋さんも顔なじみになりました。

参加者は34人。遠くは、京都、愛知からの先生方。また静岡からは、県野鳥愛護協会の幹部5人に参加していただきました。また地元の多摩地区の学校からも、多くの先生方に参加していただきました。

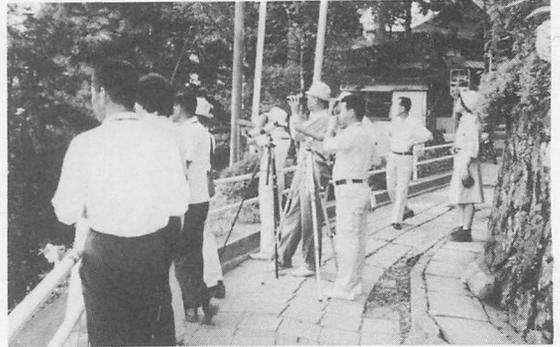
さて、8月11日、第1日目は、開会と同時にすぐ勉強です。まず明早朝の探鳥会をひかえて、連盟の松田が、御岳山の鳥についてスライドをまじえての予習です。

次に、愛知県の西浦中学校の渥美守久先生より以前おられた形原北小学校での愛鳥活動について発表していただきました。形原北小学校は、昨年度の全国鳥獣保護実績発表大会で環境庁長官賞を受賞した学校で、渥美先生は6年間活動されてこられました。

形原北小学校では、5年生が国語で「大造じいさんとガン」を学習中、近くの養魚場にカモを見に行ったことがきっかけで野鳥クラブが発足しました。

また、造成中の校庭にヒバリが巣を作り、野鳥クラブがそれを守ったことから、全校に愛鳥のムードが広がっていきました。そして、校庭の一角に「形原の森」というミニサンクチュアリーを作り実のなる木を植え鳥を呼びました。サンクチュアリーの中においた餌台のまわりに落ちているふんから、植物の種子を捜し、鳥が何を食べているか調べました。また、種子だけではわからないものは発芽させて調べるなどきめの細かい調査もしています。

このような活動の中から、子供たちは自然に興



味を持ち、自然を大切にする気持ちが一人一人に根付いたといわれました。渥美先生の素晴らしい活動は、先生ご自身が強い信念に基づいて活動されていることに起因している、ということが参加者一同よくわかりました。

夜は、夕食の後自己紹介を兼ねて愛鳥教育や研究会などについて意見をぶつけあいました。

翌12日は、4時に起床して御岳山周辺の探鳥に出発しました。出発した時はまだまっ暗だった空が、しばらく歩くと白々と明けてきました。それとともに、野鳥たちの声もよく聞こえてきました。8月も中旬ですからあまり野鳥は期待していませんでしたが、短い時間に30種余りの鳥を記録し、中でもアオバトは数羽で群れ、皆の目を楽しませてくれました。

2日目の講演は、日本鳥類保護連盟の中坪礼治専務理事より、野外観察の考え方について自身の体験をまじえながら話がありました。物の見方がつい先入観念にとらわれ、真実を見失う可能性があり、特に証拠の残らない野外観察の場合は、充分注意しないとならないという主旨でした。その後、中坪専務理事の制作した「尾瀬の四季」を上映しました。

次に愛鳥教育の問題についてディスカッションに入りました。たっぷり時間をとったつもりでしたが、討論に熱が入り、けっきょく皆の乗るケールカーを1本遅らせることになりました。

ディスカッションは、昨夜の自己紹介や渥美先生の発表の中で問題提起されたことを中心に、愛鳥教育の今後の進め方について話し合いました。

短い時間でしたが、集まる顔ぶれもなじみとなり、集まるたびにひとつひとつ問題が解決していくようになりました。今後ともよりいっそうの発展を祈ってやみません。

愛鳥教育をどのように すすめてきたか

愛知県蒲郡市立西浦中学校
渥美守久

はじめに

昭和50年より7年間、前任校である蒲郡市立形原北小学校での愛鳥指導に取りくんだ実践をふり返り、説明の背景になることを三つ述べておきたいと思います。

愛鳥指導の動機は14年前、西浦小での宿直勤務の朝、校庭を散歩するキジの姿に魅せられた時です。このような自然に子どもたちは気づかずにいるばかりか、丘から眺める美しい海岸の風景に感じ入っているのは私ばかりでありました。「見ろ、日本一のいい景色だ」と機会をつくっては海に眼を向けさせたのですが、理解に結びつくことはありませんでした。

この時、今の子どもたちのおかれている生活が野外から遠ざかってしまったことに気がつきました。自然に親しむことを教えられるでもなく育てている子どもたち。何とかしなくてはと強く心が動き始めたのです。

今や親子で野山を歩くなど考えつくことさえない働く町です。水産業、ロープ、観光などを中心とした町ですから、したがって、ほとんどの家庭は共働きです。テレビや通塾で拘束しておくことが親にとって一番安心して働くことができるわけです。

このような実態があって、郷土を教え自然と親しませるには、まず学校でやるしか方法がないことがわかってきたのです。

一方、個人的にも野鳥に深く興味が向いておりました。伊良湖畔での秋の野鳥の渡りはよく報道され有名ですが、まるで野鳥はすべてここを通り南下するかのような報道にひとつの疑問が湧いてきました。秋の渡りの季節に入ると学校の教室の窓に激突した落鳥を見つけることがよくありました。ノゴマ、シロハラ、トラツグミ、キビタキ、ムシクイの仲間など、毎年かなりの種におよんでいました。ヒヨドリの大群も次々と渡るなど、自分なりにひとつの仮説をもって野鳥を観察するようになったのです。

地形からして、静岡以東の太平洋側や赤石山系の野鳥は渥美半島コース。木曾山系の野鳥は鳳来寺山など奥三河から私たちの住む三ヶ根山をへて知多半島先端から伊勢に集まり、ここで伊良湖岬からの野鳥と合流し、大台ヶ原から紀伊山地をへて、四国山地へと南下するのではないだろうかと考えました。

この時期、山頂からの観察では、北東から南西方向に渡る場合がほとんどで、サシバは伊良湖岬にはとてもおよばないが、ヒヨドリは次々に峰から峰を渡ります。このような現象は数量のちがいはあれ、どこの地域でも観察できるのではないのでしょうか。

最近では、テレビなどで報道されると特定の地域だけクローズアップされて、マニアが殺到する異常な現象さえ見られます。自分の周辺を見おとして、安易な情報にむらがる、鳥だけを追い求めるマニアの姿は、愛鳥教育とどの点で結ばれ、どこがちがうのでしょうか。愛鳥教育は野鳥や自然を手がかりとして豊かな人間性を子どもたちに育てたい願いがあり、その先の望みとして、自然や野鳥のことを心配し、大切にできる大人がより多く増えることを期待するものでしょう。

こうした野鳥に対する気持ちが生かされる場が形原北小へ転任したときにありました。こつこつ学級から始めた愛鳥活動が野鳥クラブを生み、「広げよう愛鳥の輪を」をテーマに、一貫して取り組むことができました。気楽に始めた出発でしたので生み出す苦しみは楽しさでもありました。本校独自の愛鳥活動が展開できたのも、現顧問の鈴木武一先生が加わりいっそう活動が充実したからです。7年連続県知事賞をいただく結果になったことなど不思議でさえありました。また中央に出て、環境庁自然保護局長賞と環境庁長官賞をもいただきました。私たちの愛鳥の方法や訴えなどが、国民皆が心配や関心をもってに結びついたら、評価された点があったのかも知れません。



現在も地道に活動が継続されております。

もともと、その出発が賞を求めての活動や愛鳥モデル校の指定を受けたからしかたなくやったのではなかったので、淡々とやってこれたのでしょうか。愛鳥教育は何か大きな賞をもらったら、それで終止符を打つとかいう性格のものではありません。愛鳥自然愛護の思想を広く教育の中に定着し、広め、発展させなくてはならない永遠の教育的課題です。特に欧米に遅れをとっている教育の分野であります。

愛鳥教育研究会の発足に名を連ねた1人として昭和56年の発足総会（山階鳥類研究所）で提案させていただいた当時の内容を含め、今回御岳山夏期研修会での発表の概要を年度に沿って説明します。細かい諸活動は紙面の都合で充分説明できないのをお許してください。

愛鳥指導の経緯

昭和50年

- 国語の学習「大造じいさんとがん」の学習理解を深めるため近くの養魚場へ鴨の群れを観察に子どもたちを野外につれ出した。この時の感動が、野鳥クラブを生むきっかけとなっていきました。

昭和51年

- 野鳥クラブ誕生。毎週1回のクラブ活動で出発しました。

- 自然に恵まれた学校環境

三河湾の観光都市蒲郡の西、海山に囲まれ、田畑を埋め立てたところのできた新設10年の学校（20学級規模）。海や山へ1km以内の環境なので山野の鳥、海の鳥など種類も多く、探鳥会や定点での観察と累積すると140種ほどの野鳥が確認できました。「蒲郡の野鳥」としてまとめてあります。

- ヒバリの観察

探鳥会などを通し、子どもたちに自然が見えてくると、いろいろな発見が生まれるものです。

運動場に植えた芝生の中のクローバーの根元にヒバリが巣をつくり、運動中の野鳥クラブ員が見つけ大きわざとなりました。ロープを張り、保護区の標識を立てみんなに知らせました。

こうした機会を愛鳥活動の有力なきっかけとしました。野鳥クラブだけの独占をさけて、学校全体の問題としてとらえさせ「ヒバリを守る運動」をテーマにした臨時の児童会も開かれるなど児童への関心を高めていきました。

時を同じくして、自然破壊への社会的関心が高まっている時でもあって、ヒバリを守る子どもたちの活動は明るい話題としてマスコミが報道すると、地域が関心を高める結果になり、愛鳥活動をいい加減にやれなくなってきました。同時に子どもたちのやる気を力づけてくれました。

昭和52年

- 愛鳥の集い

愛鳥週間を何とかして身近なものにするために野鳥クラブ主催で、長時間放課を利用して「愛鳥の集い」を開き活動させてみました。この期は指導要領の改訂告示もあり、「ゆとりと充実」「豊かな人間性」を主眼にした中教審の答申など、教育課程の見直しの時期でもありました。以後、「集い」は児童会主催へと発展し、愛鳥週間の重要な学校行事として位置づけられ、今日に至っています。

- 探鳥会での失敗

フクロウの巣が発見され、野鳥クラブの観察の楽しみが増えましたが、約束が守れずクラブ以外の子に巣がのぞかれるようになり、ふ化が失敗に終わったにがい経験から、それ以後は野鳥の巣は絶対にのぞき見しないで、離れて観察する方法に変えました。そのことから双眼鏡や野鳥の図鑑を学校やPTAの方々に買っていただく機会につながっていきました。

- 県大会初参加と「私たちの自然」

現在、楽しみにしている連盟の雑誌、「私たちの



自然」が、当時、学校にも欲しいものだと思います日本鳥類保護連盟に問い合わせたところ、愛鳥モデル校にだけ贈呈しているとのこと。各県の自然保護課（農務課）に聞いてみてほしいとの返事でした。愛鳥活動の主旨を理解したからと、わざわざ1冊を毎月贈呈してくれました。

一方、県の方では愛鳥モデル校には割当てがなくて、すぐには無理だとのことでしたが、県で鳥獣保護実績発表大会があるのでぜひ参加してみないか、との誘いを受けました。雑誌欲しさのあまりに、恐る恐る参加することになってしまったのが、案の定、相手は皆、山の中の分校とか、予想もしないほど小規模な学校ばかりでした。どの学校も巢箱のことが内容の大部分を占めていたのです。

都市化の進んでいる学校からは場違いだったのかと言う心配をしながらの初参加となりました。この時、自然が失われ、変化している町でこそ愛鳥活動の大切さを訴えてみました。当時はまだ林野庁主催の色彩が濃かっただけに、初参加で県知事賞をいただきびっくりしてしまいました。

この後2年たって愛鳥モデル校の指定をいただき、月2冊の雑誌が当時送られるようになったのです。

昭和53年

愛鳥活動が高まる中で、学校の中での活動を広げる細かい計画を立てていきました。中でも愛鳥活動学年別目標や、PTAの奉仕作業による「愛鳥の森」構想、PTA親子の探鳥会の実施、児童会主催の夏冬の探鳥会、そして傷ついた野鳥の保護、さらには野鳥からほかの自然にも眼を向けて野山に自生する実のなる木の調査など活動が広く深く立体的になっていきました。

昭和54年

●中ノ川自然学習計画の推進

自然観察や野鳥の観察のほか、各教科で地域に

眼を向け、野外に出て学習し全職員で問題解決、学習の研究を進めました。

これは野鳥クラブの調査活動が、地域の自然の豊かさの紹介につながり、地域教材の大切さに気づくようになったことが要因となりました。

この学習の基本的な活動として次のように考えました。

●地域の自然や文化にふれる中で問題を見つけ解決して行く活動

理科をはじめ、社会科の学習でも地域の歴史から中央史との関連を学び、冬の持久走は運動場から出て田道を走ったり山野を跋涉します。図工なども山や森の中から主題を決めたり教材を求めもします。全教科領域でどれだけ地域の自然や文化を生かせるか、教室から出て現地で実物にふれた感動を、子どもたちが生きた学習につなげ、問題を解決していくための研究を3年にわたり害践しました。このことをすすめる中で、教師が地域の実態を理解していないことが表面化しました。子どものおどろきや喜びは教師のおどろきでもありません。理科教育としての探鳥会や四季の自然観察のほか史跡探訪などへ発展しました。

さらに実践を積みあげる中での資料作りや野外の学習コースの設定など先生方が野外へ出やすいよう努めました。

●学校緑化と形北愛鳥の森

開校以来、春秋の花壇には力を注いでいきましたので平面的な美観はととのっていましたが、校庭に大きな樹木がなく殺風景な感じがありました。PTAの協力によって、10アールほどの自然林ふうの森にして野鳥の好む実のなる木などを植え込みました。約60種の樹木を植え、山の落葉を根元に敷きつめてみました。この森は低学年の子たちの生きた学習の場として配慮してみました。

* 子どもたちが集まる森

* 課題を見つけ解決していく森

* 自然の大切さに気づく森

学校緑化といえば、木を何本植えたかと言う、



数量でのとらえ方がひとつにはありますが、私たちは子どもたちにどう役立つ森(緑化)であるかを課題とした質の追求をしました。ともすると、自慢の松や岩石が外来者の感心をかうだけのものになって、子どもの立ち入ることを許さない大人の美観の対象としての校内緑化が以外と多いことを反省材料として、生かしたかったのです。

この森は花や実が年中見られるようにして季節感を大切に考えてあります。常緑樹に混ぜて落葉樹が約半数ですから早春から新緑、紅葉、落葉への変化や、冬の明るい森の下草には冬越しするいろいろな野草や虫の仲間が、教材として生きています。秋口、勢いをつけるセイタカアワダチソウ、アレチノギク、ボロギクなどは適当に力をおさえるだけにして、多くの野草(雑草と呼ばれるもの)が発芽から花や種子になるまで大切にされている聖域であります。

冬にはピンカンサ、クロガネモチなどの実を食べに集まる野鳥を1日中、至近距離から観察し、メジロ、ウグイス、スズメ、シロハラ、ツグミ、カワラヒワ、ヒヨドリ、キジバト、モズなどを近くの理科室に常時用意された双眼鏡や望遠鏡で視野にとらえては、生態観察で子どもたちの感動が伝わってくるのです。観察カードへの記録は楽しい学習へと進んでいきました。

昭和55年

●ヒヨドリの糞に見られる植物との関係

この愛鳥の森では冬期給餌活動も行われ、熟れた柿やミカンのほか、こく類を毎日当番を決めて与えました。森にくるいろいろな野鳥の中でもヒヨドリの食欲は旺盛でほかの鳥にチャンスを与えないほどです。1ヵ所に陣取って食べながら糞をしますので、糞の掃除はクラブ員の日課でもあります。

ままた森ができて2年、植えたこともない木があちこちに見られるようになって、この不思議な現象に子どもたちは疑問を感じるようになってきま



した。野鳥とほかの自然の関係を追求するきっかけが生まれたのです。

野鳥クラブの研究

- ①発見……形北の森に植えない木が生えてきた。
(クサギ、アカメガシワ、トベラ、ナンテン、センリョウセンダンなど。)
- ②予想……野鳥が種子を運ぶのではないか。
(ヒヨドリの糞の中に種子みたいなものがあつた。)

③給餌台のヒヨドリの糞の中を調べよう。

周辺の野山で採集しておいた木の実35種と糞から出てきた種子を比較して、ヒヨドリが何の実を食べたかをつきとめることにしました。

サルトリイバラ、ツルウメモドキ、ナンテン、センダン、マンリョウ、センリョウ、マユミ、セツゲ、ヒサカキ、ネズミモチ、クロガネモチ、ピラカンサ、そのほか不明の種が8種確認されました。

このことから予想通りの結果が確かめられました。

(ヒヨドリは木の実を食べ、野山を飛び回わりながら自然の木を増やす大切な働きをしている。)

野鳥と親しんでいるうちに、植物とのつながりがわかり、森は一層子どもたちの教室となっていました。

昭和56年

ヒヨドリの糞から採集した種子を土にまくことにしました。発芽の条件をいろいろ考えて研究的に取り組みましたが、土質や深さなどむずかしい研究でした。ツゲ、ヒサカキ、センリョウなどが双葉を出したことで一応の成功をおさめました。また、3年生の理科の観察にある、サクラのつぼみは学校の森に生えるヤマナラシの大型の冬芽で一層理解を深めることもでき、自然を大切にしたい愛鳥の森は野鳥とさまざまな植物や虫、そして小動物との広い関連を発見する学習の森になったのです。

まとめ

愛鳥活動は野鳥クラブを中核として児童会、学習の中へ、そしてPTAや地域へと広げることができましたが、その活動を支えてくれた学校体制の理解と協力があったからこそ継続する力が生まれたと言えます。

巣箱を架けなければ愛鳥活動はできない、と心配した出発でありましたが、私たちなりの学校環境の中でできることから始め、ねばり強く、子どもの感動や意欲をつなげることに指導の眼を向け、子どもたちが目を輝かせるたびに教師の喜びが創意につながってこれたのです。

スズメやツバメからでも、子どもたちにやさしさを育てることや小さな生命の大切さに気づく愛の教育が始められると思います。特別大げさな活動でなく、日常の生活にいくらでもころがっているかが大事なところだと思います。小さな愛鳥活動が日常的習慣として広がるのが、愛鳥教育のひとつの方向でもあると思います。

8月12日早朝探鳥会で記録された鳥

コジュケイ、キジバト、アオバト、ヨタカ、アオゲラ、コゲラ、ツバメ、イワツバメ、キセキレイ、ヒヨドリ、ミソサザイ、トラツグミ、クロツグミ、ウグイス、クキイタダキ、エナガ、ヒガラ、シジュウカラ、コジュウカラ、メジロ、ホオジロ、イカル、カケス、ハシブトガラス。

第11回御岳山研修会参加者〔順不同〕

福田教将（五田市町立増戸小学校）

渥美守久（蒲郡市立西浦中学校）

須藤好清（群馬県立小根山森林公園）

渡辺研造（静岡野鳥愛護協会）

片瀬 実（ " " ）

久保田顕弘（ " " ）

阿部英雄（日本野鳥の会富士宮支部）

和田博幸（清水市立西河内小学校）

山田昭彦（豊田市立滝脇小学校）

平田嘉之（ " " ）

大橋一成（日光市立中宮祠小学校）

平田寛之（伊勢原市立高部屋小学校）

福田博吉（枚方市立磯島小学校）

栗原 仁（福生市立第4小学校）

宮沢當則（羽村町立東小学校）

山本 曜（東大和市立第2小学校）

西村桂子（福生市立第5小学校）

西谷司江（ " " ）

松本千鶴子（越谷市立南越谷小学校）

高城 務（宮城県柴田郡大河原中学校）

大日向政子（日本鳥類保護連盟会員）

角田節子（世田谷区立八幡小学校）

小野寺ふみ子（ " " ）

杉村千恵子（世田谷区立船橋小学校）

梅本 登（五田市町立戸倉小学校）

中込卓男（ " " ）

下田澄子（愛鳥教育研究会常任理事）

田村活三（愛鳥教育研究会会長）

中坪礼治（日本鳥類保護連盟専務理事）

松田道生（日本鳥類保護連盟事務局）

斉藤一紀（ " " ）

手代木大助（ " " ）

鳥との接し方

(財)日本鳥類保護連盟専務理事

中坪 礼治

第3の道歩んできました

今日この夏季研修会で、どのようなお話をしたら良いのかずっと考えていました。下田先生にお伺いしたところ、鳥についての話がいい、ということでしたので、私の自己紹介も兼ねてお話しいたします。

私は小学校2年生の時に父親を亡くしました。当時の私はそのことに関して、寂しさを覚えた記憶はありません。中等学校を出たくらいの時に、「親父がいたらなあ」と思ったくらいのことです。

その頃、姉がある一冊の本を持っていました。その中にハチが巣を作るところの話が載っていたんです。私はそれを全部、ただ単に紙に写して、担任の先生の机の上に置いておいたんです。そうしたら、何かの折にクラスの全員が怒られた時、自分だけがほめられたんですね。格好良かったですね。そんなこともあって、昆虫のことが書いてある記事は何でも読みあさり、虫博士になったわけです。

中学校は商業学校へ行ったんですが、奇しくも山階鳥類研究所の数百メートル先のところにありました。その学校には昆虫クラブがあり、すぐ入会しました。小学校時代から絵が自慢でして、昆虫の絵を描いては廊下にベタベタと貼ったんです。そうしたらまた先生にほめられたんですね。会員の中ではちょっといい顔になったわけです。

3年生の時、先輩から「鳥蟲歳時記」（中西悟堂）を貸してもらったんです。虫のところを読み、そのついでに鳥のところも読みました。そこで、ああ、鳥っておもしろいもんだな、と感じて、そのまま鳥の世界に入ってしまったんです。非常に動機はハッキリしているんです。

1年たって東京の井の頭公園へ行きました。その時、今でもよく覚えています、シジュウカラなど6種類の鳥がわかりました。当時は6種類なかっただけでも鬼の首をとったようでした。

3年ほどたって、終戦です。また学校へ行き直しました。鳥が好きだった、ということが縁で現在の東京農工大学へ入ったんです。そこには当時の昆虫学会の会長の石井悌先生がおられました。それ以前は内田清之助先生がおられたんです。

大学で野鳥研究会を始め、会員を募集しました。会長には石井先生になっていただき、後輩には柴田敏隆さん、岡田泰明さん、百武充さん、他には環境庁にも何人かいらっしゃいます。

昭和21年早春、東秋留の中西先生の疎開先へ伺い、戦後初の野鳥の会の例会を開くことを打ち合わせました。葉書を120枚刷り、出したところ、下村兼史さん、榎山徳太郎さん、Dr. オースチンを始めとする40人ほどの方が参加されました。

何年かたって、事情により野鳥の会を離れ、その間にNHKに入社しました。そこで「自然のアルバム」などの番組をやっていたんです。私はその仕事を通じて、第3の道で皆さんよりずっと鳥に親しんできました。というのは、毎日誰かがロケに出ていて、鳥を撮ってくるんです。鳥は大きさ、明るさ、速さなどがほどほどで、撮影に都合がいいんですね。昆虫を撮ってこい、と言っても鳥を撮ってくるんです。そして撮ってきたものを編集室で見るとですね。考え方は、毎日がバードウォッチングだったわけです。このことは自分にとって幸せでした。

時には疑いの目を持つのもいい

ところで皆さんは凶鑑や探鳥の集まりの中で、欲求不満みたいなものを感じないでしょうか。私はすぐ持つんです。何しろ、野外観察には間違いがないんですから…。絶対正確なんです。間違いである証拠がないんですからね。

例えば、カスミ網を張ると普通では考えられないような鳥がつかまりますが、野外観察の場では見たことがありません。普通ならいませんから、何かに置き換わっているんです。考えようによ

てはそれでもいいんですが、私は第3の道歩んできたのでそのところがかなり冷たく見れるんですね。

バードウォッチャーは何が目的なのか知りたかった時がありました。日常のいろいろな趣味の中で鳥だけ対象として触られない、という不満感があるのになぜ鳥を見に行くのだろうか、と思ったんですね。結局最終的には人を教える楽しみなんですね。教えることにはある意味では楽しいことなのでしょうからね。

私は初心者か順を追って覚えることを、自分で確認もしないで、その都度本を読んだり、スタッフの言うことを聞いたり、フィルムをあさったりと、違う分野の鳥の道を歩いてきたので、いろいろなことを解釈するのに違った見方をするんです。だから、いけないとは思いつつも探鳥会などには容易に溶け込めないんです。

例えば、私の常識では8月12日の御岳山にはここで繁殖した鳥の半分くらいはいたくなっています。そもそもこんな時期にバードウォッチングはやりません。この頃は、夏鳥たちは渡去の態勢に入っているんです。あと2週間もたつと宗谷海峡を越えてツグミがやってきます。そして10月の初旬に冬鳥の渡り終わっちゃうんです。8月のこの頃は日本列島が動き始める頃です。こんな時期でも山の中でバードウォッチングをしようとしている、この感覚が違うんです。

渡り鳥がどうやって南へ渡っていくとか、という話になると、皆さんはきっと太陽や月や星をコンパスにして渡る、とお考えになることでしょう。これはたった1回の実験結果が現代のこの情報の時代で広がってしまい、常識になってしまったんです。ツグミが夜渡るのに月や星が必要と言うけれども、私はおかしいと思うんです。小鳥は夜でも目が見えるのではないかと思います。この前提に立つと夜の天体は必要ないんですね。

何とか自分の仲間を増やしたいと思い、九州で

ヘリコプターを使ってサシバが渡る場所を追いかけてみました。これは鳥を追いかけるのが目的ではなく、サシバの飛ぶ高さ、その高さではどこまで見えるかを知りたかったんです。

サシバは輪を回して上昇気流にのり、高度を増やして綿雲の中に入ります。そして1400~1500mくらいのところを出たり入ったりしながら海上へ出ます。そこで向こうに島が見えないと戻ってくるんです。1回に渡る数を勘定すると3000~4000羽くらいになるんですが、そのくらいの数はまた戻ってきちゃうんですね。戻ってくるのを数に入れないと、九州南端を通過するサシバは何万羽にもなってしまうんです。とても減りゆく鳥なんかではなくてしまうわけです。

愛知県の伊良湖岬では10000羽以上のサシバが渡ると言われています。ところが伊良湖岬より上(北)でサシバがいるのは10県ぐらいしかないんです。そうすると1県に1000羽以上のサシバがいることにはなりますが、そんなにいるわけがないんです。どこかで観測が間違っているんです。

このように野外観察には間違いがないんです。間違いを訂正する機会がないから常に正しいわけです。こういうことは知っておけばいいことで、野外観察をやめるとかいうことではないんです。やっていることはそういうことなのであって、大自然に対して完全な科学を……ということではないんです。鳥が大空を軽やかに飛ぶがごとく、私たちが軽やかに鳥に対して接している、ということなんです。

さて、サシバは見えないから飛ばないのだからツルも同様だろう、ということで出水のツルが帰ってくるのを待ち伏せして追いかけたんです。本当に平戸からは上空500~600mで対馬まで見えるんですね。実際ツルはその高さを飛んでいます。平戸で聞いたりしてみると、ツルは夜も飛ぶんですね。夜もよく見えるんです。生活をやめている

だけで、見えるから鳴いたり、空腹な時は餌を食べるんです。ツルの群れが夜中でもいっせいに鳴いたりするんです。鳴くだけではなく、小麦をつまんで食でたりもしているんですね。あんな小さな小麦が食べられるのだから非常に目がいいということになるんです。

それだけ目がいいのだから、月や星に頼ることはない、というのが私の自論なんです。コヨシキリやノビタキは5月頃には真暗なうちから鳴いています。ヤブサメは真夜中もずっと鳴いています。夜中でも見えるのだろうと思います。かえって星などは見えないのではないだろうか、という考えもたまには持っているのではないだろうかと思うんです。

というのも、現代は情報の時代です。何かユニークな実験をすると、それがもともと大したものでもなく、アッという間に世間に広がってしまうんです。それを否定するには、対抗できる強力な実験をしないとだめなんです。

渡り鳥が日本海を越えてやってくる渡りのコースがありますね。これはおそらく誰も調べてはいないのに、大正時代だったかに誰かが書いてしまったんです。以後、何を見てもそう書いてあるんです。なぜでしょうか？ これだけ書いておけばもれたコースがない、ということなんです。だいたい、渡りは今バンディングなどをして調べている最中なんですから…。

例えば、インプリンティング（すりこみ）を映画に撮ろうと思うと大変なんです。そうならないんですから。しかし、そうならないと受け入れてもらえないんです。間違いなんです。ノーベル賞をもらったインプリンティングの説は絶対なんです。そういった既成の事実に合わせてるために努力するんです。でも本当はこれではダメなんです。

いつの日か、嘘をついているわけではないけれども、事実に合わせてるようになってしまいうんだ、ということをおわかってほしいんです。

将来ビデオカメラを手にとり、鳥を撮影するよ

うになったらふたつのことがわかります。ひとつは、昔やっていた連中は嘘ばかりついていたということ。もうひとつは、昔と同じようにやろうとする苦勞をするということです。

私は映像や音の世界の裏側を見ながら罪深い道を歩いています。でも時々、鳥を中立ちにして自然を楽しんだり、世界が広がったということを感じます。そして、そういうことには私も充分にお役に立てた、と思いますし、これからもお役に立ちたい、と思っています。

御岳山研修会・意見交換会から

五日市町立戸倉小学校

梅本 登

1 懇親会のようす (司会 村口末弘先生)

懇親会は、8月11日夕食後、34名の参加を得て開かれた。翌朝4時起床で探鳥会を行うということで、時間を9時までと限った。短い中で、自己紹介を兼ね、今、活動していること、悩んでいること、考えていることなどをそれぞれの方に話していただいた。短時間の発表、また、不十分な私の記録のため、充分意を尽くせませんが、主なものを紹介し、研究会全体を知るための手がかりとしていただければ幸いです。

●栗原仁先生(東京・福生第4小学校)

福生5小から同じ市内の福生4小へ転動した。そこで、まず科学クラブを作り、自然観察を半分計画し、子どもとともに活動している。野鳥については、イワツバメの生息状況が変わってきているようすなので調べている。本市は、多摩川沿いの市街地であるが、2～3年前から大きなストアの建物や、鉄筋3階建ての小学校にも営業し始めている。(※栗原先生は、福生5小で愛鳥活動を広められ、実績を積まれた。56年8月の本研修会で活動記録を発表。)

●宮沢常則先生(東京・羽村東小学校)

栗原先生と同じ福生5小から転動してきたが、子どもたちが、バードウィークさえ知らない実情。そういう中で、徐々に鳥のことを広めていきたい。(※なお、福生5小からは、西谷先生、安永先生、西村先生、転動された山本先生の参加がありました。)

●角田節子先生(世田谷・八幡小学校)

愛鳥モデル校2年目、世田谷区の住宅地域で、愛鳥活動を進めるのに迷うような所。愛鳥活動は先生が好きになることが大切だと思う。(※同校からは小野寺先生も参加され、指導者の興味関心を高めること、学校全体に広めることの難しさを話しておられた。)(愛鳥の主旨には賛同できても、「鳥より進学」の考えが、父母の間に根強くある。梅本)

●大日向政子先生(産休補助教師)

退職後、産休補助で各学校を回る。その学校学校で、子どもたちに鳥のことを広めている。子どもたちに、鳥との出会いの感激を与えたい。外に子どもを連れ出すことによって、自然に触れさせている。

●高城 務先生(宮城・大河原中学校)

伊豆沼という野鳥の生息地がある。しかし、自然が豊富にあり、恵まれている人に愛鳥や自然保護の意識が薄い。転動した学校ごとにクラブを作ったりして意識を高めている。本会に参加し、吸収して帰りたい。本会が、早く文部省の認知を受けられることを願っている。

●福田博吉先生(大阪・枚方市立磯島小学校)

愛鳥モデル校、淀川畔にあり、渡らないと言われるムクドリが見られる。クラブを作りたいが、10人未満なのでできない。動物や野鳥を愛する子どもにも非行など無いのではないか。

●山田昭彦先生(愛知・豊田市立滝脇小学校)

地域ぐるみで愛鳥活動を進めている。滝脇小の伝統となっている。学校では、ゆとりの時間、学級指導の中で指導を進めている。(同校より、平田嘉之先生も参加された。)

●阿部英雄氏(静岡県野鳥愛護協会、日本野鳥の会支部長) 野鳥愛護は、だれでもがやってほしい。学校は学校で、家庭は家庭で、それぞれの立場でやれることをやってほしい。

●片瀬 実氏(同)

消防庁勤務、山小屋を経営。「人を信じれば、人また我を信じ、鳥を信じれば、鳥また我を信じる」「昔まこの実、今の世に、今まこの実、後の世に」という言葉を信じ、活動している。(※静岡から、渡辺研造氏、愛鳥モデル校の和田先生、愛護林指定校の久保田先生が参加されました。)

以上、主な話を紹介させていただきました。このほかにも、世田谷の杉村先生、埼玉県越谷の松本先生など、多数の方から貴重なお話をいただきました。

最後に、下田澄子常任理事から次のようなお話をいただきました。

◆愛鳥活動は、理科の授業が本物でないといけないこと。従って、野鳥だけでなく、自然を総合的に見ることに。観察の方法も理科の手法と一致するという立場で考えていくこと。

◆小さい時から親しむことが、成長してから身についた活動の基となること、など。

なお、お忙しいところ、他の研究会から、夜かけつけてくださった中坪礼治日本鳥類保護連盟専務理事からは、「優秀な子どもがやるような雰囲気にする」というお話をいただきました。

2 意見交換会から (司会・梅本 登)

意見交換会は、12日、中坪先生の講演の後、御岳山ビジターセンターで開かれた。内容は、①本研究会を開く場所、②愛鳥教育の活動や本会の目的、③中坪先生の話、④機関誌について、などであった。

(1)研究会を開く場所について

本研究会は、夏季研修と冬季研修の2回を開いているが、いずれも東京近辺で開かれている。

愛鳥教育の普及ということから、東京以外の地で、持ち回りの形で開催することは可能かどうか参加者の意見を伺った。

その結果、現状では、関東を中心に開いてもらうことが良いのではないかと、という意見が多かった。地方で開けば、気軽に参加できる、という点も見逃せない。東京周辺で開く場合、参加する人が、出張扱いにならないので大変であるという意見が多い。この件については、今後の課題としていく。

(2)愛鳥教育の活動内容や、本会の目的について。

本会の目的や、他団体との関わりなどについて意見が述べられた。たとえば、◆他団体(例、野鳥の会など)と目的が同じだとしたら、価値が無い。◆子どもをひとつの組織に組み入れることが

大切である。◆だれでも参加できるような会にしてほしい、などである。

これらについては、懇親会の席上で、静岡の方が話されたように、愛鳥思想を高め自然を愛するようにするには、その場その場の人が、できることをやっていく必要がある、ということにつきる。

従って、いろいろな団体と同じ目的で、同じことをやるから無価値であるということはない。学校は、より広く基礎を養う面から、また、他団体は、社会教育、生涯教育と言われるような立場から、広く取り組むことが、発展の基と考えられる。

次に、本会は、先進校の積み上げてきたものを広く活動校に返していくように心がけてほしい、という意見があった。これについては、機関誌や研修会を通じて、さらに努力をしていきたい。そして、だれが手をつけても活動ができる、という形にすることが大切だと考えている。その中心となるものは先進モデル校であり、今後、モデル校は何をすべきかについて考える必要がある。

(3)中坪先生のお話。

「先生方は、今、何をしたらよいか迷っていらっしゃる」と話された後、次のような提案をされた。

◆欧米のように、カリキュラムを組み自然保護の教育を進める。(自然は天然資源である)

◆愛鳥モデル校と手をつなぎ、資料の提供ができるようにしたい。(日本鳥類保護連盟と愛鳥教育研究会との結びつき)

◆緑の追求を忘れないように心がけ、身近に自然を置けるように。

中坪先生のお話のように、多くの方が、迷っています。それだけに本会のしなければならぬことは多いのです。短い時間の中で述べられた貴重なご意見の一部を紹介し、懇親会、意見交換会の報告にかえさせていただきます。

愛鳥活動のヒント・3

(財)山階鳥類研究所資料室長

柴田 敏隆

林縁効果

森のことを森林というと、何やらいかめしくなるが、生態学的には陸上生態系の中で、一番複雑で、生物的生産性に富んだところである。自然林あるいは自然林的な森には、かならずマント群落と袖群落が発達していて、豊かな林縁を構成している。そして、ここは鳥が多い。

どなたかのバードウォッチングガイドに「私は草原と森とが接する部分をねらって歩く」というのがあって、ああ！この人は生態学がわかっておられる、と思いきや、「草原の鳥を追いたてるとかならず、森のへりの木に止まるから観察しやすい」とあって、ガクッときたことがあった。

ふたたび生態学を持ち出すと、森林のへりには林縁効果とか周縁効果とかいって、不思議な力があり、生物の種類も個体数も多いのである。要するに森林の中で、最も多彩で変化に富んだ部分が林縁の部分である。従来のもった自然認識だと大原生林の奥深くには、もろもろの鳥やけものが入りこみ生活している秘境があるかのように思われがちであったが、そうではない。俗言に、「鳥は賢い、へびに襲われたとき、助けてもらおうと思って人の歩く道の近くに巣を造る」というのがあるが、これもそうではない。林縁効果のしからしむところなのである。

だから探鳥の際もなるべく林縁を歩くようにするとよい。サンクチュアリーの中に、曲がりくねった道を作ったり、ところどころに広場を作るのは、林縁の長さを増やし、林縁効果を高めるのに効果的である。

ある初夏に、深いガスに閉ざされた森の中を歩いていたとき、ホオジロの声が聞こえた。「もうじき森を出るでしょう」と案内の人に言ったら、初めて来たのになぜわかるのか、とひどく感心されたことがある。ホオジロは、林縁を好んですむ鳥だからなのである。

着眼のポイント

ある大学の博物館講座の実習に参加したときのことである。講師のS先生は、旅行中の見聞を細くもろさず学生に記録させ、宿舎につくとそれを問い正すのである。すなわち、「○駅から×駅までの間に、車窓から見えた看板の数は？ 水田のへりに立つ稲を掛けるハセの横木は何段あったか？」など。その細かいこと。あまりに枝葉末節的でないか。まるで昔の軍隊の古参兵みたい、と思ったが、1週間もの実習旅行の終わりに、学生諸君は、これらの質問に結構応じられるだけの観察眼を身につけるようになっていた。

鳥を望遠鏡などで観察した直後に、目の色は何色だった？ 爪の色は？ 尾羽の両側は？ などと事細かに問い正してみると意外に答えられないものである。これは、情報を総合したものとして把握していることもあり、いくつかの要素を全体的に認識してはじめて、種の識別にいたるのだからかも知れない。

つまり、部分部分の特徴を聞かれてもわからないが、全体像ならばわかるというタイプである。しかし、本当は、部分を明確に認識することが大切で、そのためには、きめ細かな観察眼と、着眼のポイントを瞬時に判別する力を養うトレーニングを、絶えず続けることが大切である。二人一組になって、同時に3分間、同じ対象を観察し、その後一人は対象に背を向け、対象を見続け得るもう一人が、何が見えたかを質問するやり方は、ゲーム化してチームで点数を競い合うこともでき、しかも、鋭い観察眼を養うのに極めて効果的である。

ベテランドライバーの視線は、絶えず前方を横断円形になめまわすように動いて、まんべんなく情報を拾うという。それでいて細部のひとつひとつをも見ている。初心者ほど、わずかの点でしか対象をとらえないものである。

愛鳥講座／愛鳥教育の計画 その2

愛鳥教育研究会常任理事

下田 澄子

はじめに

私は子どもたちと、比較的自然環境に恵まれているといえる地域で、過ごしてまいりました。理科の、特に野外観察の指導にあたり「子どもたちが、豊かな自然環境の中において、それらを見なれてしまって無関心になっている。それをどのようにして……………」と言っては課題としたことが多かったわけです。

ところで先日、本会の御岳山の研修会で研究発表をされた、愛知県の西浦中学校の渥美先生は、子どもたちの自然認識について「農山村型では、緑を大切に、野鳥を大切に、と言っても子どもたちの認識は甘い。もっとその必要性が強調されなければならない。そして一方都市型では、子どもたちには、緑がほしい、小鳥の声が好き。という欲求がある。この欲求を満たしてやりたい」と言っておられましたが、まったく同感でした。愛鳥教育をとりあげる理由に、子どもの自然に対する認識を深めていく、子どもの自然に対する欲求を満たしていく、というように考えますと理科のねらいとはなれるものでなく、その実践の工夫は同一のものになっていくのではと思います。

都市の場合、限られた自然環境の中の残り少ない自然であっても、それを身のまわりから子どもたち自身に見つけさせ気づかせ、さらにくわしく見ていこうとする気持を育てていく、そしてそれに適切な指導援助を加えていく、そうした営みの中から、子どもたちの欲求を満たす主体的な学習が成立するようになるのではないのでしょうか。

そこで今回は、「都会の中での愛鳥活動」というテーマで、課題としては、ひとつには「都会の限られた自然環境の中で、どのようにして子どもたちに自然に目をむけさせ、気づかせ、自然を探究しようとする意欲をもたせ、主体的な実践活動をうながすことができるのか」ということを視点としてみたいと考えました。

また今までに学校紹介や研究報告が行われてお

りました学校は、農山村の小規模校が多かったので、活動を行うにあたっての、学校の中の組織のたて方や活動時間のとり方などが、比較的簡単な方策で十分でした。しかし教職員数、児童数が多い、中、大規模校となりますと、まずその辺のことが大きな問題となってきます。

学校全体が組織をあげて取り組み、ひとつの教育効果をあげるためには、何としても、そのねらいや方針、具体的な活動内容、活動時間、それをささえる教材、資料、特にこの場合、対象となる野鳥の認識、理解など、教職員全員に衆知されひとりひとりにその実践が、学校の教育目標実現の方策として受け入れられるようになることが大切であると思っています。

よって以上ふたつの観点を持って、世田谷区の先進校の足跡をたどってみたいと考えました。

都会の中での愛鳥活動 中規模校の事例

〔東京都世田谷区立二子玉川小学校〕

（昭和55年11月の研究紀要、57年6月の二子の愛鳥活動により記載します。）

I 学校規模と環境

この学校の所在地玉川町は、東京都世田谷区の西南端で、多摩川を境として川崎市に接しています。付近一帯は、風致区や鳥獣保護区に指定されていますが、近年、地下鉄や国道バイパスの開通ビル、マンション、商店、住宅の建設など都市化が急速に進んでいます。なお北側の武蔵野台地と多摩川周辺は、まだわずかですが緑が残され、川原の草むらや近くの樹木、商店の軒下などに野鳥の姿を見ることができます。

本校は、児童数 812 名、学級数、22、教職員数30名（S58 . 10 . 現在）の中規模校です。

II 愛鳥活動の推移

愛鳥モデル校の指定は、昭和52年3月で、野鳥クラブを設置して従来の観察、調査の活動に保護

活動を加えました。

なお当校は、昭和50年に野鳥観察クラブを発足させていますが、これは世田谷区が10年来、「太陽と緑の町、ヒューマン都市の実現」をめざし、その一貫として巣箱運動を行ってまいりましたので、それに賛同して設置されたわけです。

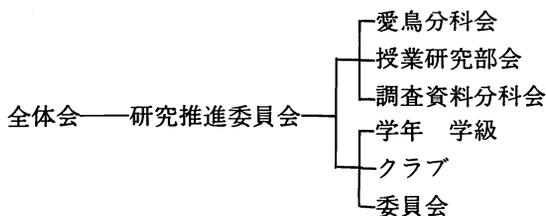
また昭和54年度当初からは、野鳥保護委員会を設けて野鳥クラブと相まって、研究、保護、両面の活動に努力してきました。そして昭和55年度には、学校裁量の時間として“二子タイム”を設定、全校的な活動をはかり今日に至っています。

なお53年11月、環境庁と(財)日本鳥類保護連盟の主催、全国鳥獣保護実績発表大会において、環境庁長官賞を受賞することができました。

東京都世田谷区発行の「野鳥は友だち」の文献によりますと、世田谷区は、健康都市区民運動の一環として愛鳥教育を始めたとあります。大都市の中でのこの方針にまず貴重なものを感じ、よろこびと感謝とうらやましさを覚えますが、これを具体的な教育活動としてつくり上げられ実践された愛鳥モデル校のさまざまなご苦労に深く敬服致しております。

なお、この区の愛鳥モデル校は、区内72校の中、6校。区内に最も多く見られる野鳥は、オナガ、ヒヨドリ、シジュウカラ、ムクドリ、キジバトなどがあります。また今までに確認された野鳥は、154種と書かれていました。

Ⅲ 研究組織とその役割 (昭和55年度組織)



1、研究推進委員会

- (1) 全体的な研究計画の立案。

- (2) 分科会活動計画の調整。
- (3) 分科会に属さない活動内容の具体的計画。
- (4) 学年、学級の活動の指導。
- (5) 他校との連絡協力など。

2、愛鳥分科会

- (1) 愛鳥モデル校としての活動計画と実施全般。
- (2) 「野鳥だより」「愛鳥ニュース」の発行計画と発行。
- (3) 文集「ことり」の発行計画。
8ミリ映画、スライドの鑑賞計画。
- (4) 野鳥観察指導の計画や資料の提供。
- (5) 児童活動の指導（野鳥クラブ、愛鳥委員会など）。

3、授業研究部分科会

- (1) 研究主題と関連教材の研究。
- (2) 研究授業の計画と指導内容の検討。
- (3) 指導案の検討と資料の研究。
- (4) 授業の分析と考察。

4、調査資料分科会

- (1) 児童の意識調査。
- (2) 地域父母の意識調査。
- (3) 調査の分析と考察。
- (4) 活動の記録収集。
(8ミリフィルム、スライド、児童作品研究物、文献など)
- (5) 学校周辺の野鳥の営巣状況の調査。

以上のように組織とその仕事の内容が、整然と緻密に、明確になっています。ここまで軌道をつくるのが大変なことですが、大きな集団がひとつの目的にむかい、効果的な歩みをするためにはこのように各担当者の仕事の内容や分担が明確になっていることが必要です。

現状から、これこれのことができる、という見通しをたてて、それを配分し組織化する一連の作業に大いに参考となるものと思います。

また特に組織の中に授業研究分科会が置かれて

学年	愛鳥活動	勤労活動	行事	クラブ	委員会	事前指導	合計
1	12	3	5			2	22
2	12	3	5			2	22
3	12	3	5	1		2	23
4	18	3	5	3	1	2	32
5	18	3	5	3	8	3	40
6	18	3	5	3	8	3	40

いますが、これは非常に貴重なことと考えます。現場の研究として、授業研究が位置づけられないようでは、やはり教師自身の自己充実が不可能になりますし、何よりも子どもの実態について詳細に確認し、その指導について衆知を集め、その学校、学年にふさわしい特色ある方策を生み出すことが不自由になると思われるからです。また特に愛鳥にかかわる内容が、授業として成立することに大いに感銘を覚えます。ただ単に子どものやれるだけの活動でなく、そこに計画的に指導のあり方が追究されているということを大切に考えたいと思います。

なお54年度の研究経過によりますと、1年間に全体会が17回、研究推進委員会が15回、分科会が15回。55年度には全体会が9回、研究推進委員会が10回、分科会が15回、開催されています。

IV 研究活動

1、昭和54年度年間計画

(1) 研究内容

- ア 教育目標の具体化を図るため、教育課程との関連を考える。
- イ 地域の特性を正しく把握し、家庭及び地域社会との連携強化の方策を考える。
- ウ 児童の実態を把握し、活動の具体化を図る
- エ 教科、道徳、特別活動の指導内容との関連を考え、授業の取り組み方について検討する。
- オ 教師自身、鳥の名前や生態を知り、指導の向上に資する。

(2) 児童の活動内容

- ア 観察。(探鳥会、営巢中の卵やひな)
- イ 記録。(記録の取り方、処理の仕方)
- ウ 文集。(「ことり」の内容)
- エ 鑑賞。(8ミリフィルム、スライド)
- オ 巣箱。餌台。(製作と設置)
- カ 絵。ポスターなど。

(3) 配慮事項

- ア 教育目標の具体化を図る一方途としての活動であることを、常に念頭におく。
 - イ 教科などの指導時間数に不足が生じないように「ゆとりの時間」の活用と、その内容を十分検討する。
 - ウ 児童や父母、地域の実態を常に把握しその上になって活動計画をたてる。
- 2、昭和55年度研究内容(愛鳥活動を中心とするが、研究対象の窓口を昨年より広めた)
- (1) ゆとりの時間を「二子タイム」と呼称し年間活動に要する時間数を定めた。
 - (2) 授業への取り組みを図る。)主として、(国語、理科、道徳、特活、二子タイム)
 - (3) 全校の集会活動に取り入れる。父母や地域に対して、愛鳥活動の実施や協力を要請する。
 - (4) 全校一鉢運動を実践し、生命尊重、自主責任、勤労の精神を育てる方策を検討する。
- 3、児童の活動内容(昨年度の内容に、次のような事柄を加え、自主的活動を充実させる)
- (1) 全校一鉢栽培。(1年アサガオ。2～3年サルビア。4～6年、キク)
 - (2) 愛鳥活動を児童会の活動のひとつとしてとり入れる。
 - (3) 「観察カード」を活用し、児童ひとりひとりの自主的活動を促す。

昭和54年度、55年度の研究内容、児童活動の概略が以上のように述べられていますが、一年目はよくその大綱を明らかにして、学校全体で共通理解を得る配慮があります。そして二年目、かなり具体的に実施の方策があげられています。全校が一緒になって歩むためには、このように全員にわかり易い内容を、実践しながら全員で協議して無理のないよう進めていくことが大切なことと思われまます。

学年	野 鳥	巣 箱	ツ バ メ
1年	野鳥に関心を持つ。	巣箱にくる鳥、シジュウカラ、ムクドリを知る。 巣箱の観察 ～たまご、ひな	ツバメの巣に関心を持つ。
2年	野鳥に関心を持つ。	巣箱にくる鳥、シジュウカラ、ムクドリの識別ができる。 巣箱の観察 ～たまご、ひな	ツバメのひなの育ち方に関心を持つ。
3年	野鳥に興味を持ち、キジバト、ムクドリ、スズメ、シジュウカラの識別ができる。 動きや鳴き声に関心を持つ。	巣箱にくる鳥、シジュウカラ、ムクドリの識別ができる。 巣箱の観察 ～たまご、ひな、巣立ちを観る。	ツバメのひなの育ち方に関心を持ち、自分から調べるができる。
4年	野鳥に興味を持ち、カラス、キジバト、ムクドリ、ヒヨドリ、スズメ、シジュウカラ、ヒバリの識別ができる。 動きや鳴き声で識別できる。	巣箱にくる鳥、シジュウカラ、ムクドリの識別ができる。 巣箱の観察 ～巣作り、たまごひな、巣立ちを調べ記録をとる。 自分で巣箱を作る。 ヒヨドリの巣を知る。	ツバメのひなの育ち方に興味を持ち、課題を見つけることができる。 雨の国から渡ってきたことを知る。
5年	野鳥に興味を持ち、カラス、キジバト、オナガ、ムクドリ、ヒヨドリ、スズメ、シジュウカラ、ヒバリ、カワラヒワ、メジロ等の識別ができる。 動きや鳴き声で識別できる。	巣箱にくる鳥の識別ができる。 巣箱の観察 ～巣作り、たまごひな、巣立ちを調べ正確な観察記録をつけることができる。 ヒヨドリ、キジバト、カワラヒワ等の自然の巣を知る。 巣箱を作り管理ができる。	ツバメの巣作りやひなの育ち方等について自分から課題をきめ記録をとれる。 ツバメについての豊かな知識を身につける。
6年	同 上	同 上	同 上

学年	給 餌	実 の なる 木	冬 鳥
1年	えさに集まる鳥に関心を持つ。	野鳥は木の実を食べることを知る。	冬鳥に関心を持つ。
2年	えさに集まる鳥に関心を持ち、キジバト、ムクドリ、スズメの識別ができる。	野鳥は木の実を食べることを知る。	冬鳥に関心を持ち、ユリカモメ、カモの識別ができる。
3年	えさに集まる鳥に関心を持ち、キジバト、ムクドリ、スズメの識別ができる。 えさをまいて鳥のせわをする。	野鳥が木の実を食べるのを見る。	冬鳥に関心を持ち、ユリカモメ、カモ、サギ、セキレイの識別ができる。
4年	給餌台に集まってくる鳥に興味を持ちキジバト、ムクドリ、スズメ、シジュウカラの識別ができる。 給餌台を作って、えさをやることができる。	実のなる木に関心を持つ。(どんな鳥が何を食べるか)。 イイギリ、ヒサカキ、ピラカンサ、ムラサキシキブ、オズミモチ	冬鳥に興味を持ち、ユリカモメ、オナガガモ、コサギ、ハクセキレイの識別ができる。 冬鳥の渡りに関心を持つ。
5年	給餌台を作り、毎日えさを与え、野鳥の愛護に努める。 キジバト、ヒヨドリ、ムクドリ、スズメ、シジュウカラ、オナガ、メジロ等の鳴き声でも識別できる。	実のなる木を調べ、自然保護に関心を持つ。 どんな鳥が何を食べるか調べる。 野鳥園の実のなる木の識別ができる。	冬鳥に興味を持ち、ユリカモメ、オナガガモ、コガモ、ハンビロガモ、コサギ、セキレイ等の識別ができる。 冬鳥の渡りに関心を持つ。 自分から進んで観察することができる。
6年	同 上	同 上 進んで自然保護に努める。	同 上 冬鳥についての知識を豊かにする。 水鳥の愛護活動をする。

V 愛鳥活動について——愛鳥分科会。

愛鳥分科会は学校全体の愛鳥活動について検討を加え、具体的な指導法や指導内容に関する研究を続けてきた。

1、活動母体と主な内容

(1) 学級、学年の活動

ページ上の表を参照。

(2) 野鳥クラブの活動

巣箱の観察や巣箱の研究、探鳥会、冬鳥の餌付けの研究。放送委員会、愛鳥委員会に対する協力。(資料提供)

(3) 愛鳥委員会の活動

校内の広報活動。(巣箱のようす、ツバメのようす、餌台の試作)野鳥園の管理とえさの補給。

(4) 放送委員会の活動

愛鳥活動に関する放送

(5) その他の活動

地区子ども会の活動。(川原の清掃、探鳥会)

2、愛鳥活動の学年別目標。

右の表を参照。

3、活動内容の具体的説明の概要。

(1) 探鳥会

野鳥への接し方はいろいろあるが、本校の場合、野鳥の生活を観察してその生態を知り、鳥への愛情を高めていくことを目的としている。その鳥への愛情が、鳥のすみやすい環境、つまり美しい二子の町作りへと発展していくことを願っている。探鳥会はその第一歩として大きな意味を持っている。

そしてその内容は、時期によって変わり三つに分けられる。すなわち4月～5月は巣箱の観察、6月はツバメの観察。11月～2月は多摩川での冬鳥の観察となっている。

ア 巣箱の観察。

校内、玉川神社、神学校など、数カ

所に架けた巣箱の巣作りのようすを観察する。(シジュウカラ、ムクドリ) 営巣の数、卵の観察、ひなの成長、親鳥の子育てのようすなどを観察する。

(この観察は、野鳥の子育てに悪影響を及ぼさないということと営巣しやす

◇ 愛鳥活動の年間計画

学期	月	活 動 内 容	教科領域での関連指導例
1 学 期	4	愛鳥週間ポスターづくり (2)	絵をかく(図工)
	4	シジュウカラ、ムクドリを観察 (1)	作文・詩をかく(国語)
	5	映画会(スライド) (1)	文集づくり(習字)
	5	シジュウカラ、ムクドリを観察 (1)	川原の清掃(行事)
	6	ツバメを観察 (1)	
	6	文集づくり (2)	
2 学 期	9	映画会(スライド) (1)	道徳(映画をみて)
	10	エサ台づくり (1)	巣箱づくり(図工)
	11	探鳥会(多摩川) (2)	作文・詩をかく(国語)
	12	巣箱づくり(修繕、清掃) (2)	川原の清掃(行事)
3 学 期	2	探鳥会(多摩川) (2)	文集づくり(習字)
	2	文集づくり (2)	作文・詩・劇作(国語)
	3	巣箱かけ(指導のみ) (1)	

い巢箱の高さになやみを持っている)
イ ツバメの観察

ツバメは学校の正門側の商店街の軒先や屋根の下に、毎年5月～6月にかけて、商店街の端から端まで500mにわたって営巣する。

巣の位置が高いのでひなのようすはよく見ることはできないが、中には餌を与えているところまで観察できたものもある。巣材料、巣作りの場所、昨年までの古い巣の利用状況などに注意している。

ウ 多摩川での冬鳥の観察

10月の終わりが冬鳥がくる。最盛期は、12月～2月。オナガガモを中心にマガモ、カルガモ、ハシビロガモなどのカモの仲間、ユリカモメ、コサギが水辺に。川原のグラウンドに、ハクセキレイ、ツグミ、タヒバリ、ハマシギ、イソシギなど見られる。

双眼鏡でどんな鳥がどのくらいいるか見て、これと思う所を見つけて望遠鏡でみる。学校には望遠鏡が3台、双眼鏡が5台ある。双眼鏡を持っている子が多いので無理なく観察できる。

昨年、野鳥クラブでは、川岸にイカダを浮かべ、その上に給食の残りのパンをまき、餌づけを試みた。ユリカモメはまいて人が少し離れると食べにくる。カモの仲間は警戒心が強いのか、暗くなってユリカモメの帰ったあとから食べていたようだ。なおこのイカダをいたずらする川遊びの人がいたことが残念だった。

(2) 巣箱作り—観察

毎年、4年生が全員で巣箱をつくり、3年以下の各学級には、教師やクラブ委

員会の児童の作ったものを5～6個ずつ配布している。

巣箱の資材は、杉材、釘、蠟番、ツの字かけ、しゅろ縄で、「小鳥の巣箱作り資料」と小冊子とともに、12月に配布し、3月まで、学校や家庭で作る、種類はシジュウカラ、ムクドリ用で、3月中旬から前記の場所、家やアパート、マンションの庭に設置する。

営巣した巣箱の数はこのページの表のとおりである。

なお観察したことは、各自で記録をとっているが、「巣箱観察カード」により、営巣場所、抱卵期間、卵の個数、巣立ちまでの日数など調査する。父母の間にも関心が高まり、記録を送ってくる人もある。

(3) 野鳥園

4年前から校舎の裏に餌台を設置し、野鳥クラブが餌をやっていたが、現在では、そこに水場をつくり、実のなる木を植え、野鳥誘致園を作った。職員中心の手作りの野鳥園である。キジバト、ムクドリ、スズメの姿がよく見られる。校舎の廊下のガラス窓に色画用紙をはり、小窓から観察するようにしてあるが、1～2年の子どもが背伸びして見ている姿をよく見かける。また秋には、コムラサキの薄紫の実や、ピラカンサの赤い実が美しい色合いを見せ、ヒサカキ、ツゲ、ネズミモチも実をつけている。

(4) 文集づくり

昭和53年6月、児童の作文、詩、観察記録などを、わら半紙1枚ずつに各クラスで印刷してもらい、それを小冊子にまとめて刊行したのがその第一歩で、以後年2回ずつ出されている。

表紙の絵も、3号からは子どもの描いたもので、4号よりは、低、中、高の三分冊になっている。(全員の作品掲載のため)

なお1号、2号は各クラスのわら半紙1枚のプリントということで、文字の大きさ、形式、内容とも自由で、多種多様であったが、3号からは、“もくじ”も入り、枠組もきめて、冊子としての体裁も整えられるようになった。またこの3号から愛鳥委員会や野鳥クラブなど特活分野の活動状況も載せられるようになった。

どの号も、低学年ほど、ひなをみたことや親鳥の行動などに対しての、おどろきが大きく、学年が進むにつれて観察はするどくなり、高学年はお話づくりで鳥の一生を語ったり、また自分が鳥になって人間の世界を批判したりして、鳥に対する心情がよく吐露されている。

父母にも啓蒙の目的で、各家庭に配布し、好評を得ているが、国語の授業にも取り入れて成果をあげていこうという声も強く出ている。

個人の活動も同じことですが、特に組織としての活動には、その記録が大切です。いろいろな人の考えがぶつかり合い、結局ひとつの大きな流れになるというひとつの道筋が、この文集の冬号の特色からも読みとれるように思われます。またその時々、参加した子どもたちの作品が残されていくことは、子ども個人にとっても意義深いことと考えられます。予算のことがあります、このように地道な工夫から出発することが貴重な結果をつくり出していきます。なお、大きい学校の場合あまりこまかく規制しないで、とにかくまとめる方向にいかれると、比較的個人への負担が軽く面白い結果も出てくるのではと思います。ただ中心で作業をする人は、かなりの労力を提供することになると考えられます。

(5) 愛鳥だより

愛鳥活動における広報活動の一環として、年4～5回、季節に応じた内容の愛鳥だよりを発行している。

5月 家や学校の近くで見られる野鳥
シジュウカラ、ツバメ、ムクドリ、ヒヨドリ

10月 実のなる木
カキ、ピラカンサ、ムラサキシキブ、ムク

11月 鳥をよぼう
餌台の作り方、餌の与え方

1月 多摩川の冬鳥
オナガガモ、ユリカモメ、ハクセキレイ、ツグミ、タヒバリ、コサギ、ハマシギ、イソシギ

3月 巣箱の作り方
ムクドリ用、シジュウカラ用
巣箱の架け方

愛鳥だよりは、鳥の絵を中心に載せ、児童に色をぬらせて、鳥の形や色を知らせ、簡単な説明で特徴をとらえさせている。

また巣箱や餌台を作ったり、実のなる木を植える時などの、愛鳥活動の資料や手引きとして活用している。

(6) 集会

児童集会は、毎週木曜日と金曜日で、第4週の木曜日の集会を愛鳥関係の集会にしている。

分担するのは、各月の愛鳥委員会、野鳥クラブ、各学年で、内容は、どこに、どんな鳥が営巣し、ひながかえったとか多摩川へどんな鳥が飛んできていたなどその時々野鳥に関することを、紙芝居人形劇、作文など自由な形で発表している。



(7) ポスター

愛鳥ポスターは、バードウィークの前に全児童で作成し、その期間中全作品を教室、廊下、掲示板などに掲示している、その他の期間は、連盟からのポスターなどを、廊下や掲示板に常時掲げている。

(8) 映画鑑賞会

映画、スライドの会は、年2回、春秋に父母も含めて実施している。内容は映画“野鳥とともに”“庭にくる鳥”スライド“日本の野鳥”などで、学年に応じたものを選んでいく。これによって野鳥の名前、生態などの理解を深めている。

(9) 野鳥情報板、一学校の近くで見られる野鳥一

正面玄関の壁面に地図を掲示し、子どもたちからよせられる情報をもとに、愛鳥委員会の児童が、木製の鳥の絵を、地図上の見かけた場所にかけている。鳥の絵は、キジバト、ムクドリ、ヒヨドリ、シジュウカラ、スズメ、ハシボソガラス、コサギ、ユリカモメ、カルガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、コガモ、ヒドリガモなどである。

以上、東京都世田谷区立二子玉川小学校の愛鳥教育の計画とその実践についてその概略を掲載させていただきました。

全校の子どもたちが、全員の先生方のご指導のもとに、それぞれの持ち場で活動し、教育目標の実現にせまっていくという貴重な考え方を背景にして、都会の中で残されていた自然を詳細に観察し、発見し、それを教材として成立させ子どもたちの人間形成に培っていく、またそのための校内の組織づくり、役割分担の明確化など、非常に多くの指針を与えていただきました。

資料を提供された二子玉川小学校に厚くお礼申しあげます。なお抜粋、要約などお許しください。児童の作品など載せたかったのですが、誌面の都合で、いずれの機会にさせていただきます。

もっともっと多くの都会で、忘れ去られている自然や野鳥、植物など、子どもたちによって発見され、子どもの科学する心や、自然を愛する優しい心情の育成に役立てられるようにと願ってやみません。

愛鳥講座／探鳥会の準備と実施

(財)日本鳥類保護連盟

松田 道生

今でも初めての探鳥会に参加した時の喜びは忘れません。私の初体験は今なき「野田の鷺山」でした。今からもう18年くらい前でしたから、今のように若い人は多くなく、おじさんやおばさんばかり20人くらい集まったのを覚えています。

今思えばたった20人ですが、1人でさびしく鳥を見ていた私にとっては、同好の士がたくさんいるのとにかくうれしくなりました。それに場所が場所だけに、鳥を見落とすことなくたっぷりと楽しめたことが、その後も探鳥会に参加した大きな要因でしょう。

しかし、1回探鳥会に出て「もう2度と出たくない」といった人に会うこともあります。あるいは、それほどおもしろみを感じないで、足が遠のいてしまった人の話を時々聞きます。いずれにしても、探鳥会が成功し、また多くの人々が参加してくれるためには周到な計画と準備が必要です。

前回は計画についてお話ししましたので、今回は準備と実施について解説しましょう。

下見をしよう

いつも歩きなれたコースでなければ、探鳥会の前に必ずそのコースの下見をしておきましょう。できれば1週間くらい前に同じコースを歩いてみると良いでしょう。春や秋は鳥の移動も激しいので、なるべく探鳥会当日に近い方が、現状を把握できます。

下見のポイントとしては、鳥や自然の状況を先に把握しておき、解説の重点をあらかじめつかんでおくことです。翼のある鳥でも、さえずりのポイントは変わりませんので、ある場所で鳴いていたら当日も同じ場所で聞くことができるはずです。冬は、水場や実のなっている木など、鳥の集まる場所を見つけておくことでしょう。また鳥ばかりでなく、森林ならば(林の)構造がもっとも観察しやすい場所、干潟だったらカニの群生しているところなどをあらかじめ知っておいて解説することも必要です。

このほか、時間の配分、コースの中で危険な場所はないか、トイレはどこにあるか、雨やどりできるところはあるか、食事はどこでとるか、また交通機関を利用する場合、発着時刻や接続なども確認しておきましょう。

注意しておきたいのは、下見をしたリーダーは、当日決して下見の時の自慢話をしてはいけないということです。探鳥会当日は人数も多くザワついているので当然鳥も少ないでしょう。また、リーダーは指導をしなくてはならないので、鳥だけを見ていた下見の時とは見つける鳥の数は違うはずです。

下見の時は何種類も見えたのに、ここには何があったのに今日はいない、などの話は参加者から聞くと自慢話にしかな聞こえませんが、探鳥会がつまらないもののように聞こえます。

P R

1人でも多くの人に参加してもらうためには、宣伝が成功するかしないかにかかっています。学校内で参加者を募るのでしたら、掲示板や廊下にポスターをはり出しましょう。このほか、校内新聞PTAの会報などに載せてもらうのも手です。ポスターの掲示は校内だけにしろ、そうでないにしろ、管理者の了解をとっておくことと、終了後はかならず撤去することを忘れないようにしましょう。

印刷物に載せてもらうためには、早めに計画を立てて締め切りに間に合うように原稿を渡さなくてはなりません。あらかじめ探鳥会に間に合う発行日と、その号の締め切りを覚えてもらっておきましょう。

たとえば(財)日本鳥類保護連盟の機関誌「私たちの自然」に載せてもらうのであれば、締め切りは前前月の25日、発行日は前月の25日、会員の手に届くのはこれから約1週間後です。10月号でしたら8月25日が締め切りで、9月25日できあがり10月2、3日に届きます。ですから10月中旬の探鳥会でし

たら、2ヵ月前の8月に計画を立てておかないはなりません。

おそらく、他の自然保護団体の機関誌も同様でしょうし、市や町の広報もこれに近いはず。いずれにしても早目に計画をたてなくてはならないわけです。

地元の新聞や日刊紙は、逆に10日前ぐらいの方が忘れられずにすみますので、そのぐらいのタイミングでたのんでみましょう。

案内には、日時、集合場所、主催者を明記するほか、地図、連絡先(電話番号も)参加費の有無なども書いておきます。日時は、午前午後を書くこと、集合場所の略図もあると親切です。またまぎらわしい地名が周辺にある場合、(たとえば上○○とか新○○とつく地名)間違わないように注意しましょう。

このほか、持ち物や服装、これは雨具、帽子、弁当、足ごしらえなどについてのアドバイスもあると良いでしょう。

次に雨の場合の実行の有無です。雨天決行、小雨決行、雨天中止、雨天順延、などです。安全な場所で初心者の少ない場合は雨天決行でも結構ですが、初心者や山道の多い場合は中止の方が無難です。

クラスや仲間同志でやる場合は、連絡網を作っておいてリーダーが最終決断を下せば良いでしょう。

しかし、不特定多数を対象とした場合、中止か決行か迷います。雨天決行ならば一目瞭然なのですが、小雨決行とか雨天中止の場合は迷うことがあります。どしゃ降りだったらもちろん出かける気にはなりませんが、今にも降りそうだったり、やみそうな時はこまります。そこで連盟では、荒天(交通機関が止まり集合場所に行きつけない時)でない限り職員が必ず集合場所に行っています。というのは、集合時間に降っていた雨がやんでしまい、近い所の人や来て来たり、遠くから来る人がついたら雨だったという場合も考えているか

らです。またこういった状態で来る人は、熱心な方ですので、そういう人の期待を裏切らないためにもです。

パンフレットそのほか

とても大切なものとしてパンフレットがあります。もちろん立派なものはありません。ガリ刷りでもコピーでもかまいません。当日配布できるように準備しておきましょう。

パンフレットには当日観察できるだろう鳥の名前、できたらイラストと特徴も明記すると良いでしょう。さらに、コースの地図と鳥以外の自然のポイントなども示します。パンフの中には、採集をしないと、ゴミを持ち帰ろう、などのマナーを書いておくことも良いでしょう。また今後の予定や会のPRも忘れずに書いておきましょう。このほか、メモ用の空欄があると便利です。

大きさはポケットに入るぐらいのもの。コンパクトにまとめましょう。いずれにしても、絵や文字はていねいに書いて読みやすい編集をしましょう。無料で配るものだといって、書きなぐったようなパンフは読む気がおきませんからね。

このほかリーダーが準備するものとして、参加者名簿(便箋に住所、氏名を書いてもらえば良い)救急薬品(カットバン、虫さされの薬、トゲぬき消毒薬、乗りもの酔いの薬など)ゴミ袋。

またいくつかの班に分かれる場合は、トランシーバーがあると便利です。時々ハンドマイクを使っている探鳥会に出会いますが、森林などではうるさいもので、他のグループに迷惑がかかりますから使うべきでないでしょう。河原や海辺、干潟などの開けたところで大人数を相手に指導する場合は、ハンドマイクの使用もいたしかたないのかもしれませんが、しかし、使用は必要最小限度にすべきでしょう。

最近の探鳥会ではネームプレートを胸につけるようになりました。お互いの顔を早くおぼえて親交を深めようというわけです。少なくともリーダー



一は名札をつけて名前を覚えてもらうようにしましょう。探鳥会を定期的に行うなら、ネームプレートプラスチックケースを文房具屋さんで大量に買い、会のマーク入の台紙を作って売れば、会の運営資金もかせぎ出せます。

指導の秘密兵器

指導をわかりやすくするためにイラストのプレートを作りましょう。見られる鳥の代表的なものを何種類か少し大きめ（B4版くらい）のイラストボードに描いて説明します。できたら絵心のある人の手描きのものが、暖かみがあって親しめます。

面倒くさい人のために、あるいは絵の下手な人のために、藪内正幸さんのイラスト集が代用できます。本の題名は「日本の野鳥」1～6（福音館書店）1～6は環境別になっているので、探鳥地に合わせて持っていけば良いでしょう。

また自由学園の吉良幸世先生は、発泡スチロールで鳥の模型を作って「今、鳴いている鳥はこれです」とポケットから取り出して説明します。器用な方は挑戦してみてください。

次は手鏡。別に鳥と顔をあわせる前に化粧直しをするわけではありません。鳥のいる場所に、光を反射させて参加者に知らせるためのものです。初心者の人々は、なかなか鳥のいる所を見つけることができません。そこで止まっている木や枝に光をあてて目安にしてやります。もちろん鳥にあてたら驚いて飛んでいってしまいますから、そつとあててやりましょう。

アメリカのオージュボン協会の探鳥会に参加した時、リーダーはバードコールを使っていました。バードコールは木の中に金属が入っていて、こするとキコ、キコと音がして、動かし方によって鳥の声に聞こえます。

これは良いと思ったのですが、日本では日本の鳥の声の出るバードコールはありません。アメリカのリーダーが使っていたバードコールは、ミヤ

マシトドやハゴロモガラスの声には聞こえますが、日本の鳥で近いものは思いあたりません。また、バードコールの音によって鳥が近づくのはなわばりに入った侵入者を追いはらうためにやってくるか、メスがオスの声に引かれてやってくるか、などで、鳥を無理矢理自然の中から引っぱり出すわけでどうも賛成できません。

それにバードコールの音を野外で聞いた時、高尾山で売っている水筒の音に鳥の声だと思って反応した後、がっかりして腹が立つのと同じ気分になります。というわけでバードコールはお薦めいたしません。

心の準備

不特定多数に参加を呼びかけた場合、何人集まるかわからない不安があります。泊りがけの場合は乗り物や宿の関係で予約をとりますから、何人集まるかわかると心の準備ができます。日帰りの場合も、パンフの部数やリーダーの人数などの都合もあって、人数の把握があらかじめできていると楽です。

案として、参加希望者をハガキで募る方法もあります。これは有効のようでそれほどでもありませんでした。というのは、当日になって都合の良くなった人が参加してはいけないと思うこと、ハガキを出したら行かなくてはならないというプレッシャーがかかり、今一歩ふみきれず、参加者が減ることも考えられます。

これは、本当にあった話です。以前大新聞でハガキで参加者を募ったところ、1通やっと返事が来ました。ところが、前日になってこの人から急に都合が悪くなったので参加できないと電話がありました。リーダー一同がっかりして、でもリーダーだけで鳥を楽しめば良いということで当日集合場所へ行ってみると、なんと100人も集まっていたうれしい悲鳴をあげたとか。これは「新浜を守る会」の第1回目の探鳥会での実話です。

現在のところ、日本野鳥の会の支部の探鳥会で

多い時 500 人集まってしまいます。平均は40~80人くらいようです。連盟の自然観察会が20~30人、多くて60人くらいです。当研究会は30人という参加人数が固定してきました。

参加人数は、その日の天気や、野球放送などにより多少の変動がありますが、同じPRをしていけば不思議と一定していくものです。何回かやれば、どこまでPRすれば何人集まるといったデータが集まりますから、それを手がかりに準備を進めましょう。

集 合

さていよいよ探鳥会当日です。リーダーは集合時間より早目に行っていましょう。遠くから来る人は、時間が予想できないので早目についてしまうものです。また、リーダーは目印になる旗を持ったり腕章をつけておくことも必要です。

同じ集合場所にいくつかの探鳥会がかち合うこともこのところ多くなりました。他のグループのリーダーとも相談してインフォメーションの時に他のグループのメンバーがまぎれ込んでいないか確認しあいましょう。

集合時間になったら参加者をいったん集め、探鳥会のあることを知らせ、始まりは遅れてくる人のために10分くらい遅らせることを伝えます。電車に乗り遅れたりして遅れてくる人はどうしてもいるものです。ただ、早くから来ている人は待ちくたびれていますから、定刻になったらひと声かけておくわけです。

集まったところをみはからって始めのあいさつをしましょう。集合場所が駅などのようなザワツワツしている所ならば、静かな所へ移動してから始めましょう。あいさつは担当者の自己紹介、今日の目的とコース、リーダーの紹介、また参加者の中で指導できる人がいたらその人も紹介してあげます。

初心者を対象とした場合には、基本的な双眼鏡の使い方、また望遠鏡の操作の仕方も伝えます。初心者の人は、おおむねストラップのヒモが長め

でブラブラしています。ベテランほどストラップが短いと思って良いでしょう。まずこのストラップの調整で、首の後のところでストラップをむすんでやればすみます。次に眼幅の合わせ方を示し、視度調整の仕方を伝えます。こうしておけば「私の双眼鏡がこわれて見えにくい」という人は減ることと思います。

望遠鏡は、どこでピントを合わせるか、三脚のパン棒の使い方。三脚の足をひっかけないように注意すること、順序よく見ること、100円を入れなくても見えることを伝えます。

このほかの注意としては、大きな音を立てないこと、ゴミを捨てないこと、生き物を採集しないこと、リーダーより先に行かないことなどを手短かに申し伝えます。あまりクドクドと、べからず集をやるのではなく、ここではサラッと述べておき、後で歩きながら自然にマナーが身につくよう指導します。この方がインパクトが強く、忘れにくいものです。

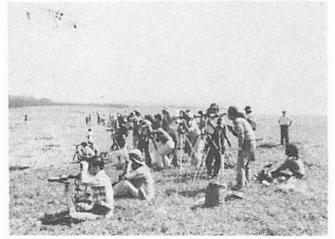
また、お弁当を持っていない人のために食料が手に入るところを教えたり、トイレはどこが最後か案内してあげると良いでしょう。

参加者の多い場合は、班分けをします。リーダーの人数や参加者のレベル、環境によって異なりますが、せいぜい20~30人が小班になり、リーダーが各班に2人つけば、目も声も行き届きます。

出 発

結局、20人くらいの班でも道の細さや足の長さの違いで長い行列になってしまいます。この時先頭はリーダーがおさえて、鳥を見つけたり観察のポイントを示唆するほか、時間の配分を考えて歩き、速度を調整します。サブリーダーは1番後を歩き、落ちこぼれないように、あるいはリーダーの見落とししたことを見つけ補佐します。列が長くなりすぎたらサブリーダーは足を早め、列がちまるように努力します。

鳥がいれば、あるいは自然の見どころで止まり



同時に休憩ができます。しかし、鳥が少なかったり、リーダーに自然を解説する能力がないとスタスタと歩いてしまい休憩を忘れます。特に鳥マニアの多い探鳥会では、鳥を1種でも多く見つけるのが目的となってしまう、初心者は疲れてしまいます。鳥以外の自然の見どころを見つけて止まるか、休憩をとることにしましょう。

昼食の後や探鳥会も終わりに近づくとガラガラしがちです。特にリーダーがダレてくると、グループ全体にそのムードが広がります。リーダー、サブリーダーとも、その辺を注意しましょう。

指 導

指導のポイントは、知識を教えることにあります。リーダーは鳥のみならず、自然のしくみやほかの野生生物、そして自然保護への認識が必要なことは述べました。現在、これらを解説した本も多く出ていますし、リーダーを養成する講座もしばしば開かれるようになりました。こうした場をとらえて勉強してもらうことはもちろん必要ですが、自分自身で消化していない知識の切り売りは相手に理解されません。しっかり自分のものにするよう本だけの知識でなく、実践をふまえて自分自身のものにしておきましょう。

また、知識の押し売りもこまりものです。さも鳥の名前を知っているぞ、とふるまうリーダーや植物の名前を自慢げに教えるリーダーは嫌われます。いろいろな知識をひけらかす人は、知識があってもリーダーとしては失格です。

まず当日の参加の顔ぶれを把握してどのぐらいのことをどの程度教えれば良いかを、集合の時に準備しておきます。そと辺にレベルをおけば中級の人にも理解できる話をするようになります。

探鳥会にありがちな指導は、ただ鳥の名前を教えて、覚えてもらうパターンです。確かに、初めに鳥の名前を覚え、相手を知るきっかけをつかみ親しんでいく、これは鳥ばかりでなく異性とのきっかけでも同じことです。しかしそれだけでなく、

習性やそれにとまなう自然との関わりを教えることも大変重要なことです。

名前を知ってもらうにしても、これは〇〇ですと教えて終わりではなく、識別のポイント、そしてなぜそういう模様があるのか、あるいはそういう^{くちばし}嘴をしているのか教えれば、すんでいる環境や食べものを知って、自然との関わりまで話が広がっていきます。

知識があっても教える能力のない人がたくさんいます。名前を言ってしくみを教科書どおり教える、これでは教室の授業と同じです。野外でのメリットは、目の前に本物があることとハブニングがあることです。本物とはいかに触れ合うか、鳥だったら光学機器を通じてばかりではなく、耳や肉眼を通して触れあえるはずで、植物や昆虫だったら、臭覚、触覚も加えて、味覚をのぞいた五感を通じて接することができます。

ハブニングを生かすためには、アドリブができなくてはなりません。鳥の出現も、花の開化もハブニングです。まして、カエルをのむヘビ、ハマシギの群れを襲うハヤブサなどに出会ったら一世代の解説をしなくてはなりません。経験を積んだ役者がアドリブができるように、リーダーも充分経験を積まなくてはなりません。

また、一方的に知識を教えるのではなく、参加者といっしょに考えることも必要です。(すぐ得た回答より、考えて得た解答の方が身につくはずです。)

時々起こるのは、リーダー同志の意見のくい違いです。特に証拠の残らない鳥の識別にありがちです。ある探鳥会で2人の先生が鳥の名前のことでケンカを始めたことがあります。こうなると、もう2度と参加者は来ないでしょう。当然意見が異なることはあるはずで、意見を出しあって参加者も含め、皆で考え、ゆずりあうことでしょう。

私がいつも思うことは、探鳥会にはユーモアのないことです。私の指導する会に参加された方はご存知のように、私は冗談ばかり言っています。

以前、不謹慎だと注意されたことがあります。まじめに、自然にとりくみ1人でも多くの仲間を増やしてやろうと考えているリーダーから見れば、不まじめに見えるかもしれません。しかし、楽しく自然を覚えてもらった方が身につきますし、もう1回参加してもらうためには楽しい方が良く決まっています。それにリーダーだって楽しい方がやりがいがあります。ユーモアは自然に身につくものですし、一般的な知識を身につけなくてはなりません。

初心者はまだ鳥や自然よりもほかのものに対する興味の方が強いはずで、今の若い人が何が好きか、概ね鳥や自然ではないはずで、ですから鳥や自然以外のものをきっかけに話を説き、こちらの陣営に引き込まなくてはならないわけです。確かに、リーダーの中には私以上に鳥や自然について知っている人はたくさんいます。しかし一般的な知識となるとどうもイマイチ、ナウくないのです。

このためには、テレビを見たり、映画を見たり、寄席に行ったり、マンガを読んだり、SFや推理小説を読んだり、いろいろなものに好奇心を持って接することです。

探鳥会でいかにマナーを知ってもらうか大きな課題です。以前、花を摘んだ人を皆の前でしかる光景を見たことがあります、あまり感心しません。まだ普通の人にとって、花を取ることは悪いという意識がないのです。皆の前で恥をかかされたら、もう2度と参加しないでしょうし、ほかの人だってうるさいリーダーだと思うか、探鳥会はタブーが多くて息苦しいという印象を持ってしまいます。以前私の指導した会で、1人の女性が平気で花を摘んでいました。私は例によって休憩の時、自然のしくみを解説し、植物1本1本の持っている必要性を話しました。そうしたら出発の時その人はそっと花を藪の中にかくしてついて来たのです。叱るより、この方が良かったのだらうと思いました。

探鳥会をやっている危険なことも多くあります。特に指導に夢中になり道路の真中で車が来るのに気がつかなかつたりすることで、これを注意するのはサブリーダーの役目です。このほか、夏のカミナリ、野犬、毒ヘビ、スズメバチなど自然の持っている危険もあります。また冬は、ハンターの流れ弾も注意しなくてはなりません。リーダー必読書として「野外における危険な生物」〔編集・(財)日本自然保護協会・思索社〕をお薦めします。

さらに、何回も開催するようでしたら保険に加入することも検討すべきでしょう。

まとめ

探鳥会の最後に見られた鳥や自然のまとめをしましょう。探鳥会では「鳥あわせ」と言っています。出現した生物の名前の確認と特徴などを復習の意味で話します。この時プレートも効果的です。

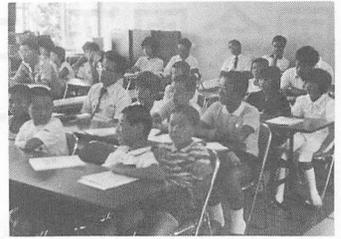
探鳥会の記録は、会報を作って発表したり、学校でしたら掲示板やコーナーを作って皆に知らせ今後の参加者を募るのに利用したり、自然保護のための資料として発表するように努めましょう。

今まで述べてきたことは、私のささやかな経験といくつかの参考書に頼りました。一読を薦める本としては「野生鳥類の保護」〔(財)日本鳥類保護連盟〕。鳥を中心にあらゆる知識が解説されています。

自然観察会の指導書としては、「自然観察指導員ハンドブック」〔(財)日本自然保護協会〕があります。また「自然観察指導の48手」〔(財)日本自然保護協会〕は、漫画でやさしく解説してあり、手ごろな入門書です。いずれも「自然観察指導員養成講座」のテキストとして作られたもので、この講座を受講されることを勧めます。このほか、目黒の自然教育園でも専門家養成の生態学や自然保護の講座が開かれています。

これらの本や情報は、自然保護団体に入会していると会報によって知ることができます。今後のことも考え、いくつかの団体に入会しておくことです。

静岡県・愛鳥校のつどい



夏休みは、各地で研修会や発表会が開催されています。特に、愛知県、神奈川県、栃木県、静岡県では、11月に行われる「全国鳥獣保護実績発表大会」にむけて県大会が開かれました。

日本鳥類保護連盟では、柳沢紀夫主管と松田道生主査が講演の依頼を受け静岡県主催の「愛鳥校のつどい」に参加しました。この愛鳥校のつどいは、毎年夏休みに1泊2日の予定で県下の少年自然の家などで児童生徒や先生方を集め、講演会、発表会、映画、探鳥会、討論会（先生方のみ）巣箱作り（子どもたちのみ）と豊富なプログラムになっており毎年100人に近い参加者があります。

また、このつどいは静岡県と静岡野鳥愛護協会とが主催で、静岡県教育委員会の後援を得ています。実施は、協会会長の渡辺研造さんをはじめ、ボランティアで参加された協会幹部の方々のご努力によって運営されています。

今年は、12回目をむかえ8月22日、23日の両日熱海市立少年自然の家にて開催されました。

この少年自然の家は熱海から車で10分くらいの山の中腹にある姫の沢公園の一角にあり、熱海の市街地や相模湾、初島が一望のもとに見わたせます。参加者は、浜松市立西部中学校、静岡市立西奈中学校、中川根中学校、浜松市立砂丘小学校、川根町立川根小学校、同中川根南部小学校、清水市立西河内小学校の、先生8名、生徒38名。このほか県から自然保護課長の森下友治さんら8名、協会から7名、県外から伊勢原市立高部屋小学校の平田豊重先生を加え総勢64名になりました。

プログラムは、22日11時に集合したのち、昼食オリエンテーションに引き続いて実績発表大会の県予選です。発表は参加者がそれぞれ行い、砂丘小学校が、県知事賞、西河内小学校が教育長賞、中川根南部小学校が協会長賞をそれぞれ受賞しました。

県知事賞を受賞した砂丘小学校は、馬込川河口をホームグラウンドとして定期的な観察を行っているほか、佐鳴湖でのテグス回収や給餌、実のなる

木の植栽などは幅広い活動が評価されました。また、選外の川根小学校は、内容はたいへん立派だったのですが昨年全国大会で林野庁長官賞を受賞していることから、今回はみおぐられました。

発表の後は、柳沢が小学生、松田が中学生を担当し、具体的な愛鳥活動の方法について話をしました。夕食のあとは、映画を3本みて就寝は9時30分。

23日は、5時起床で探鳥会です。もう8月も下旬ですから鳥も少なく天候もくもりで、きのう夜遅くまで騒いでいた子どもたちは、バテ気味でした。しかし、道端に咲くマツムシソウやワレモコウに秋のおとずれを知りました。

朝食のあとは世生と子供たちとわかれ先生はディスカッション、子どもたちは巣箱作りです。ディスカッションでは、愛鳥活動を実際に行っていくのにおいていろいろな障害になっている問題を取りあげひとつひとつ解決のために知恵を出し合いました。中でも学校教育の中にかにとり込むかという基本的な問題と、傷病鳥の救助方法と法律的な問題と具体的な活動まで話し合われました。

中でもこのつどいが、参加費がたったの1,200円にもかかわらず数10名の参加者しか集まらないという渡辺会長の提案は、学校のメインにくいこんでいない愛鳥教育の弱さが、ここでも悩みとなっていました。

この静岡の「愛鳥のつどい」は他の都道府県にはない有意義な催しといえるでしょう。こういった催しが各県に広がっていくことが、強く望まれますし、このような地方での積み重ねが、地元のエデュケーション委員会や中央では文部省を、うながして、より愛鳥教育の活動がやりやすくなり、広まっていく力となるでしょう。

（松田 道生）

国会周辺に 巣箱架け・その後

本誌6月号(259号)でも紹介をしました“国会周辺の巣箱架け”は、今年の3月7日、鳥類保護議員懇話会(井出一太郎代表)と連盟とが中心になり、東京都世田谷区の愛鳥モデル校の生徒約40人が参加して行われました。巣箱は上記世田谷区の愛鳥モデル校や青梅市立第4小学校、五日市町立戸倉小学校から提供してもらいました。

当日巣箱架けが行われたのは、東京都千代田区尾崎記念館の南北両地区で、架設した総数は25個でした。25個の内訳はシジュウカラ・スズメ用が21個、ムクドリ用が4個です。自分たちで作り、自分たちが架けた巣箱に果たして鳥が入るかどうか、生徒たちの期待と不安に満ちた顔が今でも昨日のここのように思い出されます。

生徒たちだけでなく、当日参加された方々に期待されて、鳥が入らないのでは申しわけないと、4月に2回利用状況を調査しました。その時は、ひとつの巣箱が確実に利用されている、ということしかわからず、だったらほかの巣箱も…、という程度でした。

鳥たちの繁殖も一段落した秋のはじめになって、先の鳥類保護議員懇話会から、巣箱の利用状況を調べてくれ、との依頼がありました。ちょうど、連盟でも巣箱の清掃・補修を兼ねた調査をしようとしていた矢先のことでした。

そこで9月29日に調査を実施しました。

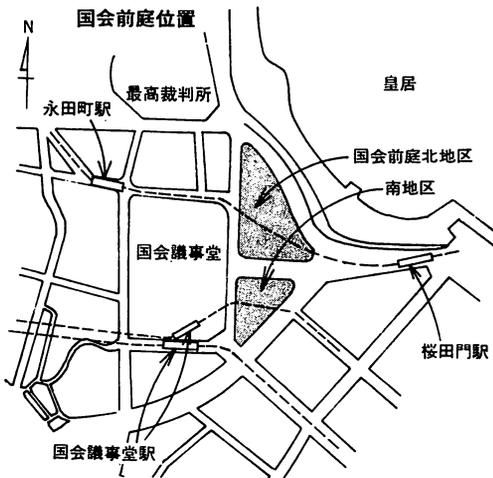


表1 巣箱の利用数および利用率

	架設数	利用数	利用率
全体 (内 訳)	25個	20個	80%
シジュウカラ・スズメ用	21個	16個	76%
ムクドリ用	4個	4個	100%

巣箱の利用状況は表1の通りです。表をご覧いただければおわかりの通り、最終的な利用率は、何と80%にも達していました。この数値から、国会周辺は、人間と同様に鳥にとっても住宅難であることがわかります。また、さらに巣箱の数を増やしたり、ほかの場所に架設しても十分に利用されることが考えられます。ムクドリ用の巣箱も、利用率が100%であることから考えても、数を増やす必要があるとも考えられます。

ともかく、生徒たちの手作りの巣箱が、これだけの利用率で利用されていたということがわかり関係者一同ホッと胸をなでおろしています。なお当地の巣箱は、また来年も鳥たちに利用されるよう、清掃・補修をしました。

巣箱架けは是か非か、というような意見もあるようです。しかし、ここでも書いたように、子どもたちが自分たちで作って、架けた巣箱に鳥が入ってくれるかなあ、という期待感を持ち、それが報われた時のうれしさから自然に対する親しみや関心が増す、ということもひとつの事実としてあるわけです。これからも、巣箱架けは自然保護への第1歩、ということを進めていきたいと思ひます。皆様のご理解とご協力を賜りますようお願いいたします。

編集後記

●10月発行予定だった11号が、いつのまにか文字通り11(月)号になってしまいました。遅くなってしまったことをまずおわびしておきます。申し訳ございませんでした。今号は、渥美先生の5ページ、下田先生の7ページとお二人ともとても読み応えのある報告をまとめていただきました。どうもご苦労さまでした。読者の方の何かの参考になれば、と思ひます。また、連盟松田の6ページの、いわばHOW TO・探鳥会は前号の続編です。前号と合わせてお読みいただければ、よりその内容が深くつかめると思ひます。そんなわけで今号は8ページ増を断行いたしました。かなえ書房の皆さん、ご苦労さまでした。そして、皆さん会員の方々のご意見・ご感想もお待ちしております。(ムネ)

